桜ヶ丘中学校区小中連携振興会（吾桜（わざくら）振興会）の取組

～やさしさとたくましさを併せ持ち、高い志を持つ子～

桜ヶ丘中学校区では、義務教育９カ年間の学校教育力を向上させるために、４つの部会と７つの担当者会を組織して、小中連携の取組を進めています。その中核となる取組として、７月１日に桜ヶ丘中学校で校区合同授業研究会が開催されました。当日は校区小・中学校５校の教職員（約１２０名）が、公開された４教科（数学、理科、英語、体育）に分かれて授業を参観し、活発な協議を行いました。最後に全体会で、教育実践「響の会」角田　明 先生（元茅ヶ崎市教育委員会指導担当参事）の講評がありました。翌日には鳥取環境大学に角田先生を講師として迎え、校区ＰＴＡ・桜ヶ丘グリーンゾーンと共催して合同研修会を行いました。関係者約３３０名の参加を得て、中学校区全体で子どもを育てる機運と参画の意識を高めました。

【授業研究及び協議の視点】
- 伝えたいことをわかるように表現させること
- 主体的な活動を通してじっくり取り組ませること
- できるようになるまで丁寧に取り組ませること

小学校教員の意見
中学校の体育実技を見て、学習規律の定着がすばらしいと感じた。

中学校教員の意見
授業も生徒指導の場であるので、集団規律の徹底を大切にしている。

本時は既習事項を活用し、発展的な問題を解くことができるということを実感させたかった。多様な方法や考え方を出させることによりねらいに迫りたい。

はっきり表現させるというねらいは、小学校で指導していく課題でもある。算数でも言語活動や自分の考えを伝え合うような活動が増えてきている。

ＡＬＴの先生と親しみたいという児童が多い。修学旅行に行った時も、外国の人に臆せず話しかけていた。

本校区の生徒は英語に対する抵抗が少ない。小学校で学んだことをもとにレベルアップした内容を教えていきたい。

角田先生の講評

授業研究は、子どもの成長を授業で確認することが重要である。したがって授業研究をするなら子どもの名前を出し合って、今日の授業で子どもがどのように変わったかを確認すべきである。

大人の幼児化が課題として見受けられる昨今、いつまでも子どもの目線ではだめ。今はできなくても、いつかはできるようにさせる、子どもをある面、大人扱いをして背伸びをさせることが重要である。

校区の小中学校の教員が一堂に会して、小学校と中学校の授業の違いについて率直な感想や意見を出し合うことで、それぞれが大切だと考えて実践していることが理解し合えるようになります。小学校で育てた力が中学校でも伸ばせるように、また中学校で身につけさせたい力の素地を小学校でつくっていけるように、子どもの育ちを中心に据え、授業改善に取り組んでいくことで小中一貫教育は動き出します。